

## Rh 不適合妊娠により出生した患児の血液型と移行抗体価の推移

◎清川 知子<sup>1)</sup>、永峰 啓丞<sup>1)</sup>、中山 小太郎純友<sup>1)</sup>、櫻木 美基子<sup>1)</sup>、森川 珠世<sup>1)</sup>、細川 美香<sup>1)</sup>、中尾 まゆみ<sup>1)</sup>  
国立大学法人 大阪大学医学部附属病院<sup>1)</sup>

【はじめに】胎児・新生児溶血性疾患は母親が産生した IgG 型赤血球抗体が胎盤を通過し児の体内で溶血を起こす。今回、抗 D、抗 C による胎児・新生児溶血性疾患を起こした症例について、出生後の血液型と移行抗体の抗体価の推移を経時的に観察したので報告する。

【症例】症例は第 2 子。在胎週数 35 週で帝王切開にて出生。Apgar Score 8/9。症例の母親は B 型 RhD 陰性、抗 D、抗 C を保有。来院時、妊娠 12 週で抗 D 抗体価 8,192 倍、抗 C 抗体価 16 倍、17 週に抗 D 抗体価 16,384 倍、抗 C 抗体価 32 倍となり胎児水腫も増悪傾向であったため胎児輸血を施行。その後も 18、19、20、22、25、28、31 週、計 8 回の胎児輸血を施行した。

【臨床経過】出生後すぐに交換輸血を予定していたが、出生時の Hb は 14.7 g/dL (臍帯血 11.1) であったため中止となった。光線療法、ガンマグロブリン療法で経過観察していたが生後 14 日目に 7.8 g/dL と貧血を認めたため RBC を輸血。その後も 23、42、44 日目に計 4 回輸血を施行した。

【検査結果】出生後の患児の血液型は O 型 RhD 陰性であったが、生後 52 日目に B 抗原、59 日目に D 抗原を検出したことから症例は B 型 RhD 陽性と考えられた。血漿中に抗 D、抗 C を認め臍帯血中の抗 D 抗体価は 16,384 倍、生後 7 日で 4,096 倍、34 日で 1,024 倍、59 日で 4 倍、118 日で陰性となった。抗 C 抗体価は 16 倍、生後 3 日で陰性となった。DAT は臍帯血では陰性、59 日目から 143 日目まで弱陽性、185 日目には陰性となった。

【まとめ】RhD 不適合による胎児・新生児溶血性疾患の場合、重症化しやすいと報告されている。今回の症例も胎児輸血を 8 回、出生後も 4 回輸血を実施した重症症例であった。出生後の患児の体内は輸血した血液製剤に置き換わっていたが、生後 52 日目から B 抗原、59 日目から D 抗原が検出された。また生後 185 日目に DAT は陰性化した、212 日目まで解離液中に抗 D を認めた。

連絡先 06-6879-5881